

## 不断の、一瞬間でもわすれてならないこと

マルクスの協力者であったヘルマン・クリーゲは、そのころまだごく若い青年であったが、1845年にアメリカに移住し、同地で共産主義の宣伝のために新聞『フォルクストリブーン』（『人民の論壇』）を創刊した。しかし、彼がこの宣伝を行ったやり方は、マルクスが、ヘルマン・クリーゲによる共産党の名誉の棄損にたいして、ドイツの共産主義者の名において断固として反対しなければならなかったほどのものであった。……………

クリーゲはこう書いた。「どの貧民でも、生産的に活動する機会をあたえてやれば、たちまち人間社会の有用な一員にかわるものである。ところで、社会が彼に、彼自身とその家族とをやしなっていけるだけの土地をあたえれば、この機会には彼に永久に保障されるのである。……この広大な地面（14億エーカーの北アメリカの国有地）を商業取引からひきあげて、大きさをかぎって労働者に確保してやるなら、アメリカにおける貧困は一挙にしてあとを絶つ。」……

マルクスはこれにこたえて言う。「クリーゲののぞむ家父長制的状態から工業的状态への前進的發展を法令で阻止したり、アメリカ東海岸の商工業諸州を家父長制的な未開状態に逆もどりさせることは、立法者の力のおよぶところでないということは、当然理解していかねばならない。」

こうして、われわれがここに見るのは、アメリカにおける本式の黒い割替の計画である。すなわち、大量の土地の商業取引からの排除、土地にたいする権利、所有あるいは用益をゆるされる土地限度の制限、これである。そして、マルクスは、最初から空想主義にたいする冷静な批判をかかげて現れ、家父長制度から工業制度への転化が不可避であること、すなわち、現代の用語でいえば、資本主義の發展が不可避であることを、指摘している。けれども、マルクスが、運動参加者が空想主義的な夢ををしているという理由で、全体としての運動そのものにたいしても否定的な態度をとったと考えるなら、大きな誤りであろう。けっしてそんなことはないのである。すでにその当時、彼の文筆生活の門出においてさえ、マルクスは、運動の現実の進歩的内容を、その金ぴかの思想的衣裳から区別することを心得ていた。「『フォルクストリブーン』の経済学」（すなわち政治経済学）「と青年アメリカ党にたいするその立場」と題した彼の批判の第二部に、マルクスはこう書いている。

「われわれは、アメリカの全国改革協議会の運動を、歴史的に正当なものとして完全に承認するものである。この運動が達成しようとしてつとめている成果は、なるほど一時的には近代ブルジョア社会の工業制度を促進するであろうが、しかしそれは、プロレタリアの一運動の結果である点で、一般に土地所有にたいする攻撃である点で、とくにアメリカの現存の諸関係のもとでは、それ自身の帰結によってかならず共産主義にまでおしすすんでいくことを、われわれは知っている。クリーゲは、ニューヨーク在住のドイツ人共産主義者たちといっしょに地代撤廃期成運動(Ant-Rent-Rewegung)に参加したのであるが、運動の内容にたち入ろうともしないで、これだけの事実とその誇大な空文句をはりつけており、それによって、青年アメリカ党とアメリカの諸事情との関連をまったく理解していないことを、証明している。……………

試みに人類にたいするクリーゲの贈り物を本気に考えてみよう。14億エーカーは、『全

人類の譲渡しえない共有財産として』保有される、という。しかも各『農民』には160エーカーが割りあてられる、という。……………もしアメリカの人口が、いままでどおりの割合で増加するとすれば、つまり二五年ごとに倍になるとすれば、この『未来永劫』はまる四〇年とはつづかないことになる。この四〇年たらずのあいだに、この14億エーカーは占有されてしまい、あとからやってくるものにはもうなにも『要求す』べきものがのこらなくなる。……………同様の経済学上の素朴さは、第一三号所載の『婦人にあたえる』という論文にも見られる。そこではクリーゲは、ニューヨーク市がロングアイランド〔ニューヨーク市の南東半をなす島〕の五万二〇〇〇エーカーの市有地を解放すれば、ニューヨークを『一挙に』あらゆる極貧状態、悲惨、犯罪から永久に解放するに十分である、と言っている。

もしクリーゲが、土地解放運動を、ある特定の事情のもとでは必然的となるプロレタリア運動の最初の形態と、すなわち、この運動の由来する当の階級の生活地位からして必然的に共産主義的な運動へ発展していかざるをえない一運動と考えたのだったら、もし彼が、アメリカにおける共産主義的傾向は、はじめは、一見すると共産主義にまったく矛盾するような、こうした土地運動的形態で現れざるをえなかったことを、しめたのだったら、なにも反対することはなかったであろう。ところが彼は、たしかにある特定の現実の人間のまだ副次的な運動形態でしかないものを、人類なるものの事業であると宣言し、自分の良心にそむいて、それを一般にあらゆる運動の終局の、最高の目標であると称し、そうすることでこの運動の明確な目的をまったくの誇大なたわごとに変えているのである。それなのに彼は、同じ論文（第10号）のなかで平然としてその勝利の歌を吟じつづけて言う。『このようにして、ヨーロッパ人の古来の夢はついに実現されるであろう。彼らは大洋のこなたにその所をえるであろう。彼らは、そこにうつり住んで、これをその手の労働でみせさせえすれば、世界のあらゆる暴君に誇らかにさげびかけることができる。

これが**私の**小屋だ、  
それは君たちに建ててもらったものではない。  
これが**私の**かまどだ、  
その火の輝きを君たちはうらやむであろう』。

これにつけくわえて、こうも言えたであろう。これが**私の**肥だめだ、私と私の妻子、作男、家畜がつくりだしたものだ、と。ところで、その『夢』がここに実現されるというヨーロッパ人とは、いったいどんな連中なのか？ 共産主義的労働者ではなく、破産した小商人や手工業親方、または零落した小屋住百姓で、アメリカでいまいちど小ブルジョアや農民になる幸運をつかもうとのぞんでいる連中である。そして、14億エーカーで実現されるという『願望』とは、どんな願望なのか？ 万人を私有者にかえようという『願望』にはほかならない。これは、万人を皇帝や国王や法王にかえようという願望と同じくらいに実現性のある、共産主義的な願望である。」

マルクスの批判は、毒と諷刺にみちている。彼がクリーゲをむちうっているのは、クリーゲの見解が、こんにちわが国の「社会革命派」のあいだに見られるものとまさに同じ特色をもっているためである。すなわち、空文句の横行、最高の革命的空想主義であると触れだされる小ブルジョア的空想、現代の経済制度とその発展との現実的基礎の無理解、これがそうである。当時はまだ未来の経済学者にすぎなかったマルクスは、驚くべき洞察力

をもって、交換、商品経済の役割を指摘している。農民は、土地はともかくとして、土地の生産物を交換するであろう、と彼は言う。そしてこの一語で万事が言いつくされている！

この問題の立て方の全休が、じつに、じつに多くの点で、ロシアの農民運動とその小ブルジョア的な「社会主義的」イデオログにあてはまる。

しかし、それと同時にマルクスは、けっしてこの小ブルジョアの運動をあっさり「否定し」たり、それを空論主義者ふうに見捨てたり、多くの経文読みにもちまえてあるように、革命的な小ブルジョア民主主義派にさわったら自分の手をよごしはしないかと、おそれたりはしなかった。運動の思想的衣装の愚かしさを容赦なく嘲笑しながらも、マルクスは、この運動の**真実**の歴史的内容を、あれこれの人々の意志や意識、夢想や理論にかかわりなく、客観的条件の力で生ぜざるをえない運動の不可避の諸結果を、冷静に唯物論的に規定することにつとめている。だから、マルクスは、共産主義者がこの運動を支持するのをとがめず、完全にそれを是認する。マルクスは、弁証法的な見地に立って、すなわち運動を全面的に観察し、過去と未来の双方を考慮に入れることによって、土地所有にたいする攻撃の革命的な側面を指摘している。マルクスは、小ブルジョアの運動を、プロレタリア的・共産主義的運動の独特の、最初の形態とみとめている。マルクスはクリーゲにむかって言う。君は、この運動によって達成しようと夢みているものを、達成できないであろう。友愛ではなしに小ブルジョアの孤立状態が、譲渡しえない農民割地ではなしに土地の商業取引への引入れが、略奪的投機師にたいする打撃ではなしに資本主義的発展の基盤の拡大が、生じるであろう。しかし、君が避けたいとむなしく考えているその資本主義的悪は、歴史的には善なのだ。というのは、それは、社会の発展をいちじるしくはやめ、共産主義運動の新しいより高度の諸形態を幾層倍も近づけるからだ。土地所有にくわえられた打撃は、所有一般にたいする不可避的な、さらにすすんだ打撃を容易にするであろう。かぎられた繁栄を一時的に——それもけっして万人にではなく——あたえるにすぎない改革をもたらす下層階級の革命的行動は、すべての勤労者に完全な人間的幸福を真に保障する改革をもたらす、もっとも下層の階級の不可避的な、さらにすすんだ革命的行動を容易にするであろう、と。

われわれロシアの社会民主主義者にとって、マルクスのクリーゲに反対しての問題の立て方は模範とされなければならない。ロシアにおけるこんにちの農民運動の真の性格が小ブルジョア的なものであることは、疑う余地がない。われわれは全力をあげてこのことを説明し、この点についてのあらゆる「社会革命派」または素朴な社会主義者のあらゆる幻想と、容赦なく、非妥協的にたたかわなければならない。いっさいの民主主義的変革を通じて完全な社会主義革命をめざして努力するプロレタリアートの独自の党を別個に組織することが、われわれの不断の、一瞬間も見うしなってはならない目標でなければならない。けれども、この理由で農民運動に背をむけるのは、もっとも見こみのない俗物根性、ペダンチズムであろう。いな、この運動が革命的民主主義的な性格をもっていることは疑いがなく、われわれは、全力をあげてこれを支持し、発展させ、それを政治的に自覚した、明確な階級的運動に変え、それをさらにおしすすめ、それとともに、手に手をとって、最後まですすまなければならない。

第8巻 アメリカの「黒い割替」についてのマルクスの所論 P323~329

『フペリョード』第15号、1905年4月20(7)日

注)……………は青山の省略した部分 新聞『フペリョード』のテキストによって印刷

## コメント

マルクスが、運動参加者が空想主義的な夢をしているという理由で、全体としての運動そのものにたいしても否定的な態度をとったと考えるなら、大きな誤りだ。マルクスは、運動の現実の進歩的内容を、その金ぴかの思想的衣裳から区別することを心得ていた。

もしクリーゲが、土地解放運動を、ある特定の事情のもとでは必然的となるプロレタリア運動の最初の一形態、この運動の由来する当の階級の生活地位からして必然的に共産主義的な運動へ発展していかざるをえない一運動と考えたのだったら、もし彼が、アメリカにおける共産主義的傾向は、はじめは、一見すると共産主義にまったく矛盾するような、こうした土地運動的形態で現れざるをえなかったことを、しめしたのだったら、なにも反対することはなかったであろう。ところが彼は、14億エーカーの北アメリカの国有地を商業取引からひきあげて、各『農民』には160エーカーが割りあてることによって『一挙に』あらゆる極貧状態、悲惨、犯罪から永久に解放するに十分である、と言ったのである。まだ副次的な運動形態でしかないものを、あらゆる運動の終局の、最高の目標であると称し、そうすることでこの運動の明確な目的をまったくの誇大なたわごとに変えているのである。しかも、その『夢』がここに実現されるというヨーロッパ人とは、共産主義的労働者ではなく、破産した小商人や手工業親方、または零落した小屋住百姓で、アメリカでいまいちど小ブルジョアや農民になる幸運をつかもうとのぞんでいる連中である。そして、14億エーカーで実現されるという『願望』とは、万人を私有者にかえようという『願望』にほかならない。マルクスは、運動の思想的衣裳の愚かしさを容赦なく嘲笑しながらも、客観的条件の力で生ぜざるをえない運動の不可避の諸結果を、冷静に唯物論的に規定することにつとめている。マルクスは、小ブルジョアの運動を、プロレタリア的・共産主義的運動の独特の、最初の形態とみとめている。

マルクスはクリーゲにむかって言う。君が避けたいとむなしく考えているその資本主義的悪は、歴史的には善なのだ。というのは、それは、社会の発展をいちじるしくはやめ、共産主義運動の新しいより高度の諸形態を幾層倍も近づけるからだ、と。

ロシアの社会民主主義者にとって、マルクスのクリーゲに反対しての問題の立て方は模範とされなければならない。ロシアにおけるこんにちの農民運動の真の性格が小ブルジョア的なものであることは、疑う余地がない。われわれは全力をあげてこのことを説明し、この点についてのあらゆる「社会革命派」または素朴な社会主義者のあらゆる幻想と、容赦なく、非妥協的にたたかわなければならない。しかし、この運動が革命的民主主義的な性格をもっていることは疑いがなく、われわれは、全力をあげてこれを支持し、発展させ、それを政治的に自覚した、明確な階級的運動に変え、それをさらにおしすすめ、それとともに、手に手をとって、最後まですすまなければならない。

そのためにも、自らの目標を隠さず、積極的に明らかにし、いっさいの民主主義的変革を通じて完全な社会主義革命をめざして努力するプロレタリアートの独自の党を別個に組織することが、われわれの不断の、一瞬間も見うしなってはならない目標でなければならない。